哲學概論

一 哲學概論の意味

哲學概論と云ふのは哲學の一般の話をするのであるから、其の範囲は極めて漠然として居る。從来哲學概論と称せられるものに二種類ある。一は著者自身の哲學の本体の議論をするものであり、一は古今東西の哲學者の全体の話をするものである。他の学問と違つて、哲学の場合には、世の中に哲學者と言はれる人のそこに精神や傾向や色彩を異にする多くの学派があり流派があり
のは澤山ある。哲學の何であるかは彼れ等によつて述べられて

2

又個人的相違さへもある。哲学者によつてそれぞれ異なる学説さへも立てられ
来れ、実は真の哲学者と呼ばれるものは澤山ある。哲学は
れる。従つて、
実と云ふ哲学の歴史すら数ある位である。沢山の所謂哲学は
者が出て種々様々なる学説を唱へられたものである。従つて
哲学概論の場合に於て、主として著者独自の世界観や人生観を
なるものは何れの世界の一人の哲学者が、その哲学の大
体を述べようとするものがあるとすれば、それは此の即ち二種類の中
の前者に属し、これに反して、歴史的に現はれた全体沢山の哲学者種類の大体を述べようとする
とすれば、それは
そのなかにあるならば即ち二種類の中の後者に属するのである
ある。今ここに述べんとするのは即ち後者に属するものである。

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

ある。

二　哲学概念の変遷

然らば哲学とは何であるか、其の概念を正確に決定することは全く不可能と言っても宜い。我々の少年時代には今日言ふ博物学、即ち動物学、植物学、鉱物学等を含ませたものを自然哲学と称して居った位である。哲学の文字はなか〳〵広く使はれて居ったのである。従って哲学の概念を明にするのは困難であるけれども、先づ一通

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

り之を明にすることを努めて見ねばならぬ。動物学とか、植物学とか言ふやうな所謂自然科学は其の概念が略一定して居るけれども、哲学の概念は人々違つて居つて、なかなか一定することが出来ないのである。独逸の有名なる哲学史家ヴィンデルバンドさへも哲学の概念は一定して居らぬと言うて居る。けれども哲学と言ふ以上に於ては何か一定のものがなければならないのである。極めて漠然として居るけれども、哲学と言ふものがあるの

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

であつて、何かそこには一定の概念を發見することは出来ないこともないやうである。それも時代に依つて哲学と言はれるものは違つて居るから先づ歴史的に之を見やうと思ふ。

三　古代に於ける哲学の概念

古代の希臘に於て西洋紀元前約八世紀頃にヘシオドスなどが使つたと云ふフィロソファーと云ふ言葉はソファー即ち知識と、フィロソ即ち愛すると云ふ二つの言葉から出

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

来て居るので、知識を愛し、知識を追求すると云ふやうな意味である。即ち是が社會に取って必要であるとか、又は宗教的に必要であるとか云ふことではなくして、知識其のものを愛する。即ち知識のために知識を求めると云ふことが哲学の本義であったのである。であるからして希臘の古代に於ては哲学は、宗教、藝術、道徳などとは區別されて居ったのである。さうしてソークラテス、プラトン、アリストテレースの時代に及んでは数学、幾

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

何學を始め物理學、生物學に至るまで總て哲學なる名称の下に總括された。即ち知識の統一したものであったからである。従って哲學は學問と言ふ意味であった。其の中に就ては、プラトンの辯證法は永久不変の原理を探究する學問であり、アリストテレースの第一哲學は事物の第一原理、又は最高原理を探究する學問であった。是等は後世に於ける形而上學の本質であって、即ち根本的なる原理原則を探究するものである。プラトン、アリストテ

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

レースに至つては兎に角是が一番難しいのであるから
して哲学の本領は此に在るのであると解釈されて居つた
のである。

然るに希臘の末期から羅馬の中世に掛けては、哲学は単に知識のために知識を求めると云ふやうなものではなくして、道徳的活動が学問の中心と看做され、従つて哲学は人生哲学であつて、人生を主とするものであると考へられるやうに成つて来た。即ち更に換言すれば哲学は

八ノ廿五 牛込神楽坂下 山田紙店 C

倫理説、又は道徳説となつて了つたのである。羅馬時代に於ては此の傾向は最も著しかつた。羅馬の中世に至つては耶蘇教が盛んであつて、神学が独り勢力をしめて居る時代であつたから、哲学は宗教的信仰を解説する所の学問となつた。換言すれば神学が哲学であるとせられた。更に言ひ換へて見れば宗教的哲学が即ち哲学であるとすゆられせられたのである。何れも皆其の時代の人の心持の向ふ所を示すものであるのである。

四 十七八世紀の哲学概念

近代即ち文藝復興の時期から十七八世紀の頃までを考へて見ると、デカルト、スピノザなどと云ふ哲学の大家が出たが、是等の人々は所謂唯理論と云ふ立脚地にあつたものであつたから、唯理窟を研究するものである。従つて哲学と言つても大体に於ては希臘のプラトンとや、アリストテレースの古代に復つた感がある。即ち哲学は一切の学問と同一視されるやうになつた。英吉利に

八ノ廿五 牛込神楽坂下 山田紙店 C

ホッブスと云ふ学者が居つたけれども、此の学者などは原因、結果に関する学問は総て哲学と呼んで居つた位である。即ち一切の学問なるものは皆哲学と呼ばれて居つたのである。兎に角其の一つの根本を考へやうとするのであるから、唯学問と言はずして哲学と呼びたいやうな気持がしたのである。けれども其の学問の中に於ても事物の根本原理、又は第一原理と云ふやうな極く深遠なることを論ずるものが特別なる哲学、即ち形而上学である

八ノ廿五 牛込神楽坂下 山田紙店 C

と云ふやうに考へられて居ったのである。是がデカルト、スピノザ、又は独逸のライブニッツなどと云ふやうな人人の考へた所である。それからカントになるのであるがカントは哲学者中の哲学者と云ふやうな人である。カントは正確に一切の根本原理を研究しやうとしたのであって、其の基礎とする所は認識哲学である。認識哲学と云ふのは色んな事物を認識するのは如何なる方法であるかを研究するものである。けれどもカントも矢張り真正な

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

る形而上學、即ち一切事物の根本原理を研究せんとする
れあつたのである。彼には三大著述がある。第一を純粋
理性批判と云ふ、即ち認識哲學としての論理學である。
第二は實踐理性批判と云ひ、即ち倫理哲學である。第三
は判斷力批判と云ふ、即ち藝術哲學及目的論である。カ
ントは此の三大著述を爲して之を以て哲學の全体である
と規定した。カントの後にフィヒテ、シェリング、ヘーゲル
などと云ふ大家が出たけれども、大体に於てカントノ考

八ノ廿五 牛込神楽坂下 山田紙店 C

と同様なものである。

三　現在の哲学

十九世紀に至っては自然科学を始めとして個々の科学が非常な発達を来たした。科学は宇宙、人生の汎ゆる方面を研究するものである。従って従来哲学であると考へられて居ったものも科学と考へられるやうになって来た。科学であると考へられると云ふのは何であると云ふと、即ち実験又は経験に依って研究せられ、何人も然りと思

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店

はざるを得ない知識に到達することの出来る学問であると云ふのである。然らば哲学は何を以て其の対象とするのであるかと云ふことは随分困難な問題となつてゐた。事物を研究するものは皆科学であるとするならば哲学の領分はなくなつてしまふだらうと云ふやうに考へられたのである。之れに対して仏蘭西のコントと云ふ社会学を造つた学者は、哲学は単に科学を分類したり、又は整理するに過ぎないものであると論じた。コント自身は実証哲学

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

と言ふ書物を著して数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学と言ふ順序に配列して居るが、詰り斯う言ふやうな分類、整理を行ふのが即ち哲学であると言ふやうに考へたのである。何かそこに矢張り真理があるやうにも見えるけれども、哲学は極めて簡単なものになつて了ふのである。独逸にヴントと言ふ人が出た。世界的の大家であつて、世界大戦中に没した人であるが、此の人は言うて居る。哲学は一切の科学的知識の綜合であつて、統

八ノ廿五 牛込神楽坂下 山田紙店 C

一であると。即ち各科学は一部々々を研究するものであるけれども、哲学は其の研究の結果を合せて宇宙全体に関することを研究するものであると云ふのである。ヴントは左様に言ふけれども、それではまだなかく哲学の範囲がはつきりして居らない。それ等の知識の綜合などと云ふことは果して出来るかどうかと云ふことが疑しいのである。何となれば一切の科学を知るなどと云ふことは唯に出来ることでない。従つて之を綜合するなどと

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

云ふことは殆ど空想に近いことであると云ふのである。
そこで何か哲学には哲学固有の対象があるのであらうか、若し其の固有の対象があれば科学とは判然区別することが出来るのであるが、と云ふ考が起つて色々に工夫する人があつた。そこで第一の考は斯う云ふのであつた。即ち哲学は認識学でなければならぬと云ふのである。個々の科学は認識の原理を假定して了つて居るのである。此れ動物が居ると言つても、動物を認識するには認識す

八ノ廿五 牛込神楽坂下 山田紙店 C

るだけの方法があるのであるけれども、さう言ふことは仮定して了つて、直ちに其の事物があるものとして了つて取るのである。即ち認識の原理を原理として研究することをなさうとするのである。例へば真理であると言つても真理であると言ふことは即ち認識の確實と言ふことを意味するのである。原因結果と言つても矢張り認識の原理である。是等のことは皆科学は仮定して取るのであつて、真理とは何か、とか。原因結果とは何か、と言ふやうなこと、

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

其のものを研究することとしたのである。之を研究対象とするものは即ち哲学でなければならないのである、と。斯様に解釈するものは例へば科学者の中でヘルムホルツのやうな人であつて、カントを研究して、カントの認識論の立場に立つて、さうして哲学は認識の学問であると解釈して居る。

又次に哲学の対象は人間の精神活動であるとするものもあつた。精神活動は即ち所謂内的経験であつて、直接

人生に関する内的経験であるのである。英吉利のヒュームとか、又は同じく英吉利のスチュアート・ミルとかいふやうな人は倫理学、論理学、美学、宗教学等は皆哲学であるとして居る。何となれば皆人間内部の経験であるからである。独逸に於てもリップスの如きは心理学は哲学であると云ふやうに言つた。勿論是等の人の考は其の心理を研究すると云ふやうな深い考ではなくして、寧ろ哲学と、科学とを同一視すると云ふやうな立場であるので

ある。

然らば以上の二説に付いて後者は科学を哲学と混同する疑があるから姑く之を除くとしても、前者即ち認識論が哲学であるとする説に付いて之を考へて見るのに、或る程科学に於て研究しない所の認識論は哲学であるとしても宜いかも知れない。併し乍ら之を以て哲学の全体であるとするのは如何であるか、非常に疑しいことである。

斯くして十九世紀の末から二十世紀に亘って哲学の

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

概念は再び元へ還つた。殊にカントのやうな考へ方が二十世紀に至つては新しく発達するやうになつた。所謂新カント派の哲学史家ウィンデルバンドの如きは最も有名なものである。其の議論は哲学とは何であるかと云ふ有名なる論文に現はれて居る。彼は哲学は価値の学問であると云つて居る。従つて事実の学問である。科学から判然と区別せられなければならない、と云ふのである。価値は例へば美しいとか、善いとか、悪いとか、真であるとか、

真であるとか云ふやうなことであつて、主観と云ふものを立てなければ考へることの出来ないものである。即ち主観に取つて其の事物が美しく見えるとか、善いと思はれる。真と考へられるとか云ふやうな工合に事物と主観との関係に於て始めて價値を認めることが出来るのである。主観との関係を離れて其の價値を見ることは出来ないのである。之れに対して事實なるものは毛頭主観との関係を持たないものである。例へば太陽は人間に取つて値打がある

とか、価打がないとか云ふのではなく、唯太陽として存在して居るのである。科學は斯の如き事實を事實として事實の儘に取扱ふものであって、事實であらさへすれば宜いのである。価打があるとか、ないとか、價値が多いとか、少いとか云ふやうな等級を立てることはないのである。然るに美しいとか、醜いとか、善いとか、悪いとか、本當とか、偽りとか云ふことは之を感受して判斷するものがなければならぬ。其の判斷するものが或は高く

八ノ廿五 牛込神楽坂下 山田紙店 C

直踏みすることもあるし、或は低く直踏みをすることもある。是の如き価値と呼ばれるのである。価値の価値たる所以は其の価打であるからして、価打と云ふのは斯くすればこそ始めて価打があるのであると云ふのであつて、斯くあるべしと云ふ規範性を備へて居るのが特徴である。例へば善と云ふのは斯くあるべし、斯くあるべからず、と云ふ規範性を備へて居るのである。之を備へて居ればこそ始めて主観に取つて価値があるのである。之

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

れなして事實は唯斯くあると云ふのみであつて、批判性は備つて居ないのである。此の價値は或は妥當性などとも言ふ。又普遍的價値とか、普遍的妥當性などとも言はれて居る。斯の如き價値を論ずるのが哲學であるとするのがヴィンデルバンドの見解である。一言にして約すれば哲學は眞善美の普遍的價値、即ち根本的なる規範性を研究するものであるとするのである。之をカントの哲學に從つて言つて見ると認識論的論理學は眞と云ふ價値

八ノ廿五　牛込神樂坂下　山田紙店　C

と論ずる学問であり、倫理哲学は善と云ふ価値を論ずる学問である。芸術哲学は美と云ふ価値を論ずるものである。

斯様な見解であるからしてヴィンデルバンドに取っては哲学を以て科学的知識の最高統一であるなどと云ふのは非常に曖昧なものであるのである。其の上斯の如き一切の科学を綜合するなどと云ふことは全然出来得べきことではないと云ふのである。ヴィンデルバンドの此の考

八ノ廿五 牛込神楽坂下 山田紙店 C

は明にカントの考を正確にしたものであると言ってもよいのである。ヴィンデルバンドは各種の普遍的価値を統一するとそれが総て世界観になるのであるとして、哲学は即ち最も高尚なる学問的世界観であると解釈した。新カント派の中にはマールブルヒ学派とするのがある。之に属するコーヘン以下ナトルプは哲学と科学とは断然異なるものであるとした。彼等は科学は事実の学問であるけれども、哲学は論理的にしかくあるべき筈の普遍

八ノ廿五 牛込神楽坂下 山田紙店 C

的法則なるものを研究する学問であるとして居る。例へば科学は個々の原因結果の関係を研究する学問であるに反して、哲学は直ちに原因結果の法則其のものを研究するのである。故にスナトルプは此の両者の関係を次のやうに言つて居る。事実を研究する学問の進歩は無限である。底止する所がない。哲学は一切の学問の根柢に横はる所の普遍的、必然的法則を研究する学問である。従つて哲学は他の学問とは異なる。一定普遍的の方法学であ

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

ることが出来る。然るにカントの哲学概念が特殊な認識に発達したのである。現象学と云ふのがある。是はフッサールと云ふ哲学者が創説したものであるが、彼れはナトルプと類似した哲学概念を有して居る。彼は事実と本質とを区別して本質は論理的な普遍性と、必然性とを備へて居る事実が成立し得る根本存在であるとなすのである。換言すれば事実が事実として成立する根本原理が即ち本質であるとなすのである。本質なしには事物は

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

存在しない。事実を研究するのが科学であつて、本質を研究するものが本質学である。然らば如何なるものが本質であるかと云ふと、其の具体的例を挙げると、例へば数とか、法則のやうなものは本質であるのである。従つて数学とか、純粋物理学、純粋論理学などは本質学である。哲学も当然此の本質学の一種であつて、謂はば最も根本的な本質学であるのである。斯う云ふやうな哲学の概念が今日は存在して居るのである。

八ノ廿五　牛込神楽坂下　山田紙店　C

特別
ヌ6
9304
A14